The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	松山先生を懐ふ
Author(s)	野滿, 隆治
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 23-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88737
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

松山先生を懐ふ

野滿隆治

想へば早や二十有五年の昔しになる。私共は、廣島高等師範學校の第二回豫科生となつて、明治三十六年の春入學した。其時代の豫科は、將來の專門如何に拘らず、皆同一の準備教育だつたので、物理化學志望の我々にも漢學の授業があつた。當時、廣島高師の漢學擔任には松山、三宅の二教授があつて、共に當代得難き碩學であつた。そして私達は幸ひにも一年間といふもの、この兩先生から御薫陶を忝うする機會を惠まれたのであつた。三宅少太郎先生は、自ら信ずること最も深く、仲々痛快な、一寸毛色の變つた御性格なので、一ヶ年の間に吾々の耳にした面白い話も隨分多く、例へば、『目下日本での漢學者では、先づ重野安繹さん、次に何某、次に誰々……』と指を折つて數へられるが、不思議と、栂指はその儘に殘して置いて人さし指から曲げてある。その栂指は？と聞けば、ハッハッハと笑はれるといつた樣な鹽梅であつた。

之に反して、松山直藏先生は、絶えず笑みを含んだ樣な柔和な温容に、身を持すること最も謹直、

言行苟もせざる底の御性格であつた。課業は時間通りきち〳〵と少しも狂ひなく、講義は諄々として親切を極め、それに一つは教科書が高等漢文讀本といつた樣な抜萃ものであつた爲めもあらうが、御教授は最も平穩順調に進んだのであつた。世間でいはゆる逸話と稱する樣な御話は、いくら想ひ出さうとしても、一つも私の頭に殘つて居ない。否々、逸話らしい逸話を殘さぬといふのが、先生の眞骨頂で、先生の逸話といつてもよいではあるまいか。私が今、二十五年前の往時を點念追懐して眼前に彷彿と浮び來るものは、只々、フロックコートに身を包んで教壇に立てるありし昔の先生の温容それのみである。オヽ、そのフロックコート!!! 廣島時代の先生は始終フロックコートを着て居られた。眞夏はどうであつたか忘れたが、冬は勿論春も秋も常にフロックに身を固めて居られたのであつた。其の理由の一部には、先生が幾分短軀の傾きがあつた爲めもあるかは知らぬが、恐らく先生の御性格が、服裝に對するお好みをその樣に仕向けたものと確信する。實際私は、男の洋裝中フロックコートが最もよく先生の御性格に適應し、ピッタリと氣持よく先生の御氣質を象徴し、內外身心が融合一致して居たように思ふ。

玲瓏玉の如き人格と、フロックの愛用とは、直ちに、逸話らしい逸話を作らぬ人を何人にも聯想させるであらう。私は此の如き松山先生を懐ひ且つしのび參らせる。

（終）